

環境・文化・国際・福祉・経済・教育など、社会全体がバランスのとれた持続可能な社会づくりを共通の目的として未来に向け価値を創造したい。

# 共創

2018年 2月 第12号（最終号）

（一社）四日市大学エネルギー環境教育研究会 四季報

ミノサザイ

## 四季報“共創”の最終号を迎えて ～これまでの御礼を添えて～

（一社）四日市大学エネルギー環境教育研究会 副会長兼事務局長 矢口 芳枝

社会全体がバランスの取れた持続可能な社会づくり、つまり、環境はもとより、社会の全ての課題を皆で共に手をつなぎ協働しながら、未来に向けた価値を生み出す紙面に！という願いを込めた“共創”の表題です。

平成27年5月号の第1号が誕生しましたが、この度、3年間を経て最終号を迎えることになりました。

<http://www.yokkaichi-ene.com/>（HPに掲載）

当会は、助成金や委託金を獲得して活動しているため、資金面ではとても脆弱であり、真っ先に「協力します」と当会へ訪問いただいた企業の方、今でも鮮明に覚えている出来事でした。こちらからは是非にと、協賛金をお願いした企業、ささえあい創造基金からもご支援を得て、四季報“共創”は、全国の温暖化活動防止センター、中部7県や滋賀、静岡、三重県内の市町・企業・団体・個人などへ送付しご覧いただきました。

そして、創刊号よりご寄稿にご協力いただいた行政（環境省、志摩市、四日市市、四日市港管理組合）学校（内部小学校、北星高校、京都大学、四日市大学）企業（三重銀総研）、団体（EPO中部、ESD-J、国際宇宙航行連盟、総合地球環境学研究所、地域問題研究所、持続可能な社会を創る元気ネット、ホテルの里づくり連

絡協議会、e-plus生涯学習研究所、地域づくり工房）の専門家の皆様さまにご寄稿いただき、本当に快く引き受けていただきました。

このように、多くのご支援・協力者に支えられての四季報“共創”の発行ができましたこと、感慨深く衷心よりお礼を申し上げます。

「単なるPR紙はやめて、社会にお役に立てる内容の情報紙発行を目指しましょう」と当会メンバーに提案して了解をいただきました。

毎号の表紙に様々な内容で発信いただきました当会会長新田義孝（四日市大学名誉教授）、写真や寄稿文の版下づくりや表紙の写真と説明文を担当の（と）は戸田和男、「季節のとびら」で俳句を届けながら身近な出来事を発信した（て）の寺本佐利、対談での速記や編集業務を近藤実千代が担当。これら維持を当会メンバーで行いました。

日々忙しい活動事業の中にも関わらず、責任をもってそれぞれの担当を全うしていただきましたことを心より感謝しています。

「最後の号は事務局長が寄稿を」とのメンバーからの声があり、これまでを振り返ってみました。～これまでの心からの御礼を込めて～ありがとうございました。

# ‘ふるさと’という絆

四日市大学名誉教授 新田義孝

四日市大学特任教授の定年を迎えたとき、石川県人会の石田寛人会長から県人会の世話役を仰せつかり、最初は総務委員長代行、そして専務理事の二年目を終えたところです。

総務委員長代行を引き受けるに当たって、総務委員会で「石川県人会が最高にうまく運営されるという姿とは、一体何ですか？」といきなり不躰な質問をしました。「皆さんがこうした委員会活動を始め、ふるさと訪問旅行、新年会等々で一緒に楽しく集う、その楽しさを演出することです」という答えが返ってきました。びっくりしたのは、役員の重さに比例して年会費が高くなることでした。え！高い会費を払って世話役をするの？と、それまでの人生に経験したことのない世界でした。



昨年11月末に、台湾石川県人会との交流、烏山頭ダムの視察のため、石田会長夫妻以下20名訪台しました。石川県出身で大東亜戦

争中に烏山頭ダムを中心とした大灌漑施設を作るのに陣頭指揮をとった八田與一技師は、台湾の教科書にも載っている台湾で一番尊敬されている日本人です。当時、台湾であっても、日本人は上から目線で台湾住民を見ていた筈です。八田技師が台湾の人たちから慕われている一番の理由は、ダムの建設中に犠牲となった134

名の慰霊碑に、全員の名前が日本人と台湾人とを区別せずに、亡くなった順にその名前が彫られていることにあります。これは八田技師の強い意志でなされたので、台湾の人たちに感動を今も与え続けているとのことでした。

台湾石川県人会との交流会では、徳光重人会長が、台湾に来て、郷土の大先輩である八田與一技師が台湾の人たちから慕われていることに感激したとの言葉に始まり、台湾に住み続けることに決意した理由もそこにあると挨拶されました。

そして、交流会はまるで旧知の仲、親類縁者が集まったような親しみの中に、大変に盛り上がりました。

そこで思うのですが、ふるさとを共有しているというご縁には、とくに熟年に達してからは大変に重いものがあります。何も海外で出会った人と同じ四日市出身だったという偶然に驚くことではありません。名古屋や大阪より遠い東京圏で働き、人生を送っている人たちとの交流があれば、彼ら彼女らはふるさとを訪問して、我がふるさとの存在を確認し、ふるさとの人たちと交流を愉しむでしょう。そうした出会いの場を作ることも、四日市あるいは北勢地域の‘持続可能性’の一つの柱になるかも知れません。古くからあるお祭り、コンビナートの夜景クルーズ、山頂からの風景、こども達との接触、ふるさと産食材の堪能…いろいろなメニューが考えられます。

昨年11月に、東京永田町にある四日市市東京事務所を訪れて、伊勢竹鶏物語IIを紹介しました。そして、里山の竹を土壌改良に使用した素晴らしい農産物を東京在住の四日市出身者にご紹介したいと提案しました。具体的に直接出身

者に情報をお伝えする手段をお持ちではないことが分かりました。でも、市のHPなどに掲載する可能性があるかと仰っていました。

石川県出身者でも、金沢出身の方々は、どちらかという、高校の同窓会には出席しても、ふるさと会の結成には積極的ではありません。その理由は、金沢以外の‘地方’から‘立身出世’して‘金沢に勤務したという気持ちと、金沢で幼少時代を過ごしていないというところにあるのだと思います。そういう意味で金沢は‘小東京’なのでしょう。名古屋の住人も同様だと推察します。

小松市以下、金沢以外の市や町の出身者はそれぞれふるさと会を結成して、長いところでは60周年を迎えています。

四日市は金沢ほど大都会ではありませんので、市民には地元の絆があります。

ふるさと共有の良さは、小学校や中学校が同じだったとか、どこそこの誰ちゃんは共通のお友達だとか、その誰ちゃんのお母さんや妹を知ってる、あるいは遠い親戚であることを発見するとか、そういった人の絆の発見とそれを維持することにふるさとの絆があります。

成長ドライバーを捉えるため四苦八苦している。

四日市出身者のふるさと会が、もし東京に来て（すでにあるのかも知れませんが）、そこと当研究会が何らかの関係を持つことができれば、次の新しい展開ができるかも知れないと、‘妄想’しつつ、最終号への寄稿とさせていただきます。

## 次の世代へ地域課題を持続的な地域へと果敢に突き進みたい ～各主体との連携から環境保全～



(一社) 四日市大学エネルギー環境教育研究会 副会長兼事務局長 矢口 芳枝

Think Globally, Act Locally 「地球規模で考え足元から行動を」との言葉のように、地球規模で気候変動による異常気象が頻繁に起きており、これらは、経済発展に端を発していることから、私たちにできることは、日々の暮らし方や地域の課題の改善に、地域イノベーションの拡充で取り組むことにあると思っています。

三重県の北部に位置する四日市市の人口は、約31万人で面積は約206km<sup>2</sup>、昭和30年代に入り高度成長期に国の施策により経済成長を目指し、伊勢湾のウォーターフロント沿いに、広大な石油化学コンビナート群が建築され操業を開始、後に深刻な大気汚染から「四日市公害・喘息」を引き起こし全国的にも四日市の名が知れ渡ることになりました。

現在は、後世に「四日市公害」の教訓を風化させることなく、持続的な未来をつくっていく目的で「四日市公害と環境未来館」が建設され、きれいな青空も維持しています。

当地は、昭和30年代までの里地はのどかな田園地帯も多く、春には菜の花が一面に咲き、里山は緑豊かで動物も多く、生態系は健全でありました。

しかし、昭和40年代から高度成長時代と共に、団地の建設も増えていき、人口も増加しました。近年は、高速道路も鈴鹿・四日市間の頻繁な渋滞を起こし、再び、四日市の名が全国へ発信されるに至り、四日市大学周辺だけを見ても現在、新名神高速道路や防災拠点施設や東芝メモリ工場の建設などの大規模開発が続き、豊かだった自然環境は確実に失われています。

特に、四日市北部に点在する里山は孟宗竹に覆われ、三重県内では津に次いで2番目に多い竹林面積を要しています。そんな中で荒廃し放置されたところも多く、生態系・生物多様性の劣化が各所で

見受けられます。

思い起こせば、2010年に名古屋で開催された「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」に、サイドイベントとして外国政府関係者向けにと、環境省からの依頼で当会が招待講演の役割を担い、輸入飼料の課題や公害となる鶏舎や糞に匂いをなくす研究を行った「伊勢竹鶏物語～3Rプロジェクト～」の紹介を新田義孝会長が英語でスピーチされ、多くの質問も受けておられました。

一方、関係者出席の名簿の提出やセキュリティなども厳しく、タイムリミットのなかでくたくたになりながらカナダの本部とやりとりしたことを思い出されます。

当時、歴史的な成果を得られたと報じられた「愛知目標」は、2050年までに「自然と共生する世界」を実現する長期目標が掲げられ、2020年までに生物多様性の損失を止めるために効果的かつ緊急な行動を実施するために20の目標が策定されました

2012年度の「生物多様性国家戦略」においても、重点的な取り組みのひとつとして、里地里山の保全活用に向けた取り組みを推進していくことが掲げられています。

地域の里山を自分たちの手でと、各地域の団体の皆さま方が四日市市の「市民緑地制度」を利用して手入れをされ、地域住民の憩いの場として活用されています。又、四日市大学内の里山も（特非）PPK四日市の皆さまが保全活動をされています。

当会は、「伊勢竹鶏物語～3Rプロジェクト～Part 2」として、これらの場所から間伐された竹を粉にして圃場に活用する資源とすべき試みをしています。

専門家が、気候変動などから圃場の劣化から農業生産物の警鐘をならしています。私たちの命にかかわる「食」に関することですから深刻に捉えなければなりません。

健全な圃場、栄養価の高い生産物にするためにも、竹粉を農業者に利用されるシステムづくりのために、その効果検証の研究に当大学の環境情報学部や公的機関で実証実験に取り掛かっています。詳しくは（四季報“共創”第9号に掲載）しています。

最後に今後の活動について、少しご紹介します。現状の暮らしや地域環境が当たり前と感じている若い保護者や児童らに地域課題を伝え、未来の主役を担っていただくことを目的に、ESD（Education for Sustainable Development）「持続可能な開発のための教育」の体験学習を行います。八郷地域の各団体の皆さまと力を合わせて、四日市大学にもご協力をいただき、平成30年度には4回の体験学習を行い、延べ500人以上の参加を目指します。

また、社会人向けとして「生態系調和型の農業塾」も開催します。上記の圃場の課題や、農業離れによる放棄耕作地の増加などの課題もあり、環境に良い農業、美味しさと栄養面などにこだわった農業として、専門家を迎えて、稲づくりと野菜づくりの実践と講座を行います。

そして、これまでに続けてきた学校や地域での各ESD教育についても、年延べで5,000人規模の参加を目指して果敢に進めて参ります。このような活動を実施できるのも、何より当会に対して、ご指導やご支援いただける多くの皆様のご協力の賜物であります。確実に真摯に丁寧をモットーに実施してまいりますので、今後ともよろしくお願ひします。

## SDGs(持続可能な開発目標)を先人の「共に生きる知恵」から学ぶ

(一社) 四日市大学エネルギー環境教育研究会 研究員 寺本 佐利

世界が抱える課題をどう解決していくか、SDGs(持続可能な開発目標)は、2015年9月の国連総会で、加入193ヶ国が参加して採択された行動計画で、2030年までに、「誰もが人間らしく、安全に暮らせる社会と豊かな自然環境とを両立させよう」という世界各国が協力し努力して取り組むものです。

17の目標があり主なものは、貧困や飢餓、健康と福祉、ジェンダー、教育、エネルギー、環境、気候変動、平和と公正である。

我が国では、政府だけでなく、産業界や各市民団体においても積極的な取り組みが行われており、今後各方面で推進されることとなっている。

一方年末年始の全国各地の神事や祭事、初詣の風景、食文化の様子をテレビで拝見していると、我々の先人達は、すでに先述の17の課題を充分熟知していたと考察出来る。それはその土地の風土や文化の中から長い間に先人達が築いてきた貴重な遺産でもある。

元日の天声人語に「人の世の営みは平安の昔も今も根本的に変わらぬ」と記載されており、物事の現象だけでなく、本質的なことを探究することが大切である。



我々の先人達は自然との関わりの中で生活をしてきた為、自然崇拝や自然への畏敬の念、自然の恵みに感謝の気持ちを持ち、故郷の里海や里山は、皆が生きていく為のもので、公のものでもない、個人のものでもない、皆んなのもの「総有」ということで守られていた。

老若男女が初詣の氏神様は、「鎮守の杜」として地域の氏子達が奉仕をし、年越しにはかがり火を焚いて、身近な自然崇拝・体験の場として鎮座している。

千二百年続いている伊勢神宮のご遷宮は、「常若の精神」と「技術伝承」の意味合いが強く、多くが「寄付」によって賄われていることや、江戸時代の参拝には「布施」という制度もあった。サミットで訪れた外国人が豊かな自然と、神秘的な社に感嘆した。

先人たちは、日々の生活は質素にしながら「もったいない」「おかげさま」「ほどほどに」と限りある資源を分かち合っていた。

上の地位についたものが持つ「矜持」や、財を成した者が「篤志家」として神社仏閣や学校や道路などの公共施設に多額の寄付をしていた。

又「結」や「講」「無尽」「出不足」「村八分」(排除の精神ではなく同胞の精神)という制度や仕組みを作り、「分相応」ということを大切にして生きており、「向こう三軒両隣り」と皆が助け合い、支え合う安全・安心な地域社会を構築し、学校の先生や公職についている人を尊敬し、目上の人

や弱い立場の人を大切に、「貧しくても心豊かに」生い立ちや環境の違うもの同士が、お互いに助け合い、補い合い、生かし合って暮らしていた。

いつの時代からか、グローバルな社会になり、人々の意識や価値観も大きく変化するとともに、行き過ぎた個人主義や平等主義の尊重、経済優先社会、又テクノロジーの発展等で便利な今の生活が当たり前のようになり、少しずつ忘れられていった。

その結果、長期的視点の欠如した「今だけ、お金だけ、自分だけ」と自己の目先の利益と保身しか見ず、周りのことも将来のことも見えていない人々が蔓延している。

グローバル化や経済発展、テクノロジーの進化を否定するものではないが、これまでの「競争社会」はいつまでも続かないと誰もが感じている。これからはお互いが相手との違いを大切に、人々がつながり共に生きる社会「共創社会」を目指していくことが大切である。今こそ「先人の智慧」のことを少しでも知る者が、そのことを誇りに思うとともに、次の世代に語り継いでいくことこそが、「地域の持続可能な社会」を構築していくヒントになるのではないか。家族が集う機会に子や孫にほんの少しでも伝承していくことが今を生きる者の役目と考える。

最終号に寄せて願いを込めて、私案の機会とさせていただきます。

## 北陸の大雪に思うこと —昭和の時代と今—

「共創」表紙の写真担当 戸田 和男

子どもの頃、2階の窓から出入りした記憶がある。降雪の量は先日の大雪と変わりはないと思うが、当時の除雪や道路の状況、交通量の違いなどで今より積雪は多くあったように思う。道路が広くなり舗装が完備し、車も増えた。と言っても今の交通量には程遠い。当然国道の圧雪は日に日に高くなって行った。冬用タイヤではなく、全てチェーンを巻いて、走れないと判断したら無理することなく仕事を終えていた。物流の根幹は鉄道で、当時の国鉄マンは鉄道の確保に必死の格闘をしていたはずだ。大量消費の現在では、物量と即日配達など何かが狂えば、たちまち麻痺することになってしまう。

年を経て、今と昔の違いが分かる年代になってしまったが、私が育った時代の環境と今の違いの大きさを、今の子供たちが感じているのかを危惧する。「地球温暖化」「低炭素社会」など、変化を見届けるのは無理なことである。持続可能な社会を絶やすことが無いように、先読みしたことを、子どもたちに伝えなければならない時代なのだと思う。SDGsや、ESDなど、国際的な行動が必要となっている今、大人達子供たちにどう伝えるのが課題となっている。いや、本当は大人達の無関心さを変える作業が必要なのでは…。飢餓に喘いでいる人たちが、目の前の生きることに全力を使っている一方、地球環境に無関心な人たちがいるのも現実である。

身の回りにある当たり前のものや、珍しいもの、きれいなもの、知らなかったものなどを、リアルタイムに表紙の写真として掲載してきた。みんなが「これはなんだ！」と話題になれば、望むところである。最終号をふりかえってもらう機会として、第1号から第12号までの写真を彩りにあげました。

第1号 イヌナシ



第5号 マツバウンラン



第9号 ルリタテハ



第2号 茅の葺き替え



第6号 日本鹿



第10号 ペルトン水車



第3号 長元坊



第7号 錦秋



第11号 末広橋梁



第4号 新名神高速道路



第8号 翡翠



第12号 ミソサザイ



【表紙の写真】 ミソサザイ (留鳥)

日本で見られる2番目に小さい鳥と言われている。色目も暗くて見つけにくい、大きなはっきりした囀りが得意である。特に珍しい鳥ではないが、団地に近い小さな川筋で、カワガラスと同様に見ることができるようになった。いままで、鈴鹿山脈の麓の溪流で見られていたものである。

“共創”第6号に高速道路建設ラッシュを記したが、そのあたりが生息域なのだ。オオタカなど希少生物も生息する環境である。何らかの影響が出始めているのかもしれない。

余談であるが、団地内のミカンの木から採ってきた卵を孵化させた、ナガサキアゲハの♂・♀の写真を見せてもらった。

地球温暖化も他人事では…。 (と)



カワガラス



高速道路予定地(2015. 1)



高速道路建設中(2018. 1)

協賛金御礼

四季報発行3年となり、当研究会の活動に下記の団体をご協賛いただき厚く感謝申し上げます。



四日市大学

三重県四日市市萱生町1200番地  
<http://www.yokkaichi-u.ac.jp>



中部電力株式会社

～おかげさまで創業39周年～



JTB株式会社 第一観光  
JTB総合提携店：三重県・四日市・桑名・いなべ店舗ネットワーク  
地域や人を、もっと元気に D I K 地域プロジェクト

三重県四日市市中川原1丁目1番29号  
<http://www.daiichi-kanko.co.jp>



ささき観光バス

三重県三重郡菟野町菟野9711-1  
<http://www.ssk-kanko.co.jp>



株式会社コーストメイト

三重県四日市市羽津4502  
<http://www.tsgroup-co.com>

御礼 (編集子一同)

当研究会では、環境教育、地域循環型社会づくり、四季報“共創”の3つを柱とした社会貢献事業を行ってきました。

四季報“共創”のみ今号をもちまして終了いたします。ご協力の数々に心から感謝申し上げます。今後ともよろしくご指導、ご協力をお願い申し上げます。



四季報：共創 2018. 2発行 第12号 (最終号) 発行：一般社団法人 四日市大学エネルギー環境教育研究会  
会長： 新田 義孝



〒512-8512 四日市市萱生町1200番地 四日市大学内  
電話：059-363-1414 Fax 059-363-1414 メール：[info@yokkaichi.ene.com](mailto:info@yokkaichi.ene.com)  
ホームページ：[yokkaichi-ene.com](http://yokkaichi-ene.com)

編集長(副会長兼事務局長)：矢口芳枝 担当：近藤実千代 写真：戸田和男 コラム：寺本佐利